

目次

『古事記』二九番歌―大刀佩けましを 衣着せましを―考	藤原 享和	1
「軍王の山を見て作る歌」	寺川 眞知夫	17
有間皇子をめぐる歌群の形成と紀伊国行幸	駒木 敏	30
調使首作歌と調使家記	垣見 修司	46
源氏物語画帖「源氏御手かゝみ」(同志社大学所蔵)の紹介	岩坪 健	57
孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質―仏教の世俗化と本覚思想―	廣田 收	67
妙見信仰の今様―『梁塵秘抄』二八七番歌をめくって―	植木 朝子	79
覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの―巖島明神を介して、竜女、そして文殊菩薩へ―	小林 加代子	90
石清水俗別当紀輔任と紀兼貞のこと―『古事談』巻第五「神社仏寺」第三話・第七話から―	生井 真理子	104
『雑談集』説話と『沙石集』伝本	加美 甲多	117
番外曲「玉鉾」考―古今注との関連―その他	稲田 秀雄	129
『茶話指月集』覚書―その成立の一背景・新出資料久田宗全書簡から―	生形 貴重	141
「女殺油地獄」の劇作法―与兵衛と未来成仏の思想―	早川 久美子	152

一英斎芳艶「文治三年奥州高館合戦自衣川白竜昇天」凶論——〈八犬伝〉との連関——	三宅宏幸	164
山東京山と万屋和助——『歴世女装考』刊行に関わる謎——	神谷勝広	178
落書とからくり	山田和人	187
『剪燈新話句解』考——朝鮮本と和刻本——付・伝本目録	邊 恩田	200
正岡子規一派の蕪村調と「俳句らしさ」——内藤鳴雪「秋の水湛然として日午なり」について——	青木亮人	212
小栗風葉「手桔足桎」と〈換菓篇〉——自筆原稿と「二六新報」から窺えること——	田中 励儀	226
「それから」論——「誠」と「自然」をめぐる語って——	木村 功	240
ジャポニスムとニーチェ——芥川龍之介と永遠回帰をめぐる考察——	西村 将洋	254
佐藤春夫「更生記」論——「狂気」をめぐる語り——	西川 貴子	266
新生新派の〈樋口一葉〉——「一葉舟」のドラマトゥルギー——	笹尾 佳代	278
井上靖「僧行賀の涙」論——方法としての〈視点〉——	山田 哲久	291
佐多稲子「灰色の午後」論——恥をさらすということ——	北川 秋雄	303
安部公房作「日本の日蝕」を読む／視る	瀬崎 圭二	314
三島由紀夫「弱法師」論——背景としての昭和三十五年——	木谷 真紀子	327
加藤一雄「蘆刈」を読む	堀部 功夫	340
『箱男』における革命家幻想	黒田 大河	354

「石壕吏」(杜甫)の実践報告——謎解きをしながら——	加藤昌孝	367
教室で読まれる『こころ』——「明治の精神」を鍵語として——	篠原武志	387
発心集の「けり」のテキスト機能——係り結びの使い分け——	藤井俊博	398
新島襄の書簡に見える「幸福」——幕末武士階級の漢語——	浅野敏彦	410
金石学と鉱物学——氷は鉱物か——	吉野政治	421
梅棹忠夫の文章はなぜ明快なのか	大島中正	441
『とほがたり』における「申す」の意味・用法	入江さやか	454
和漢朗詠集近世板本の短歌表記における漢字	石井久雄	467